

研究ノート

TAT 物語の特徴と分析・解釈の要諦

明治大学 高瀬 由嗣

TAT story characteristics: analysis and interpretation

TAKASE, Yuji (Meiji University)

In this study, the characteristics of Thematic Apperception Test (TAT) stories emerging from conventional analytical methods are discussed and the contributions of the story analysis proposed by Suzuki (1997) explained. By applying the conventional method, the difficulties in decomposing TAT story contents were shown to be due to the nature of gestalt. Therefore, TAT story analyses will need to focus on theme and plot without decomposing them into their elements. Furthermore, because TAT stories are suitable for content analysis, formal analysis alone cannot sufficiently grasp their meaning. Based on these findings, a strategy for effectively using Suzuki's method is discussed.

Key words: TAT (Thematic Apperception Test), analysis method, interpretation

TAT (主題統覚検査) はロールシャッハ・テストと並んで有名な投射法心理検査である。心理臨床に関わる研究者・実践者であるならば、教育・研修の場では必ず一度はその名前に触れたことはあろう。もちろん、TATが有名であるのは本邦に限ったことではなく、海外の心理臨床場面でも同様である。なかんずく米国においては、この検査発祥の地でもあるせいか、その傾向は顕著である (Serles, 2017 など)。

ところが、実際の臨床場面でのこの検査の使用頻度を問うと、特に本邦においてはかなり低く、ロールシャッハ・テストのそれに遠く及ばない。多くの研究者はその理由を、TAT反応の分析の難しさや煩雑さに帰す。言うまでもなく、TAT反応とは、各々のカードに示された絵から連想され、構成された物語である。それは、後に詳述するとおり、要素ごとに分解し、それぞれの要素を加算や除算によって得点化するのは難しい。同じ投射法に分類されるロールシャッハ・テストでは、領域、決定因、形態水準といった観点から反応をさまざまな要素に分解しやすいのに対し、物語は、それ自体が完結したひとつのまとまりであるため、この種のアプローチを適用しにくいのである。物語分析に伴うこうした困難さが、臨床現場でTATが十分に浸透しなかったいちばん大きな理由である。

では、TAT反応を適切に分析し解釈するためには、いかにアプローチすべきか。本稿は改めてこの

問題を検討すべく、まずは従来の分析法を通して浮かび上がるTAT反応の特徴を論じる。そのうえで、鈴木(1997)の提唱する物語分析法の利点について解説を行うとともに、そこに筆者自身の見解も加え、TAT物語を効果的に分析するための方略を模索する。

欲求 - 圧力分析を通してみたTAT物語の特徴

TAT反応を一定の観点から分類し、得点化するという方法を導入したのは、このテストの創案者であるMurrayその人である。彼が提唱した「欲求 - 圧力分析」とは、周知のとおり、物語の主人公がほぼ被検査者自身の姿を表しているという前提のもとに成立している (Murray, 1943)。すなわち、主人公の持つ願望・意図・衝動といった周囲の環境に向かって発せられる力(欲求)と、環境から主人公の側に発せられた力(圧力)とを詳細に吟味すれば、被検査者の行動様相や、支配的な動機や環境の捉え方等を組織的に把握できる、とする考え方である。例えば、頬杖をつき深く思い悩んだような表情で、机の上に置かれたヴァイオリンを眺める少年像が描かれたカード1に次のような物語が与えられた場合を考えてみたい。

「少年は本当は遊びに行きたいのだけれど、母親からヴァイオリンの練習をするようきつく言われ、

どうしたらいいか悩んでいる」

この反応では「遊びたい」(すなわち母親の命令や支配から自由になりたい)という少年の切実な思いが「欲求」となり、母親から寄せられる期待や、実際に課せられる教育に束縛され、自由にふるまえないことが「圧力」となる。そして、この「欲求」と「圧力」は、それぞれ5段階で評定され、最終的には合計された得点をマレーの提供する標準点と比較するという手続きが取られる。

これは一見すると合理的であり、有効な方法のように思われる。ところが、実際にこの方法を試してみると、ほどなくして行き詰まりを覚える。なぜならば、物語とはそれ自体が完結した一つのゲシュタルトであるため、その内容を分解し、それぞれの要素を独立に扱おうと、もともと物語が内包していた意味を損なうことに気づかされるからである。このことをカード13MFを題材に示したい。

13MFには、後景に、上半身を露わにした(ように見える)女性が、あたかも身体の力が弛緩したかのように腕を投げ出してベッドに横たわる姿が描かれている。この女性の手前にはネクタイを身につけた男性が立ち尽くし、自らの目の辺りを右腕で覆っている。この絵を見る人は、まず後景の女性の姿に大いに注意が惹きつけられるようである。それは女性が胸のあたりを剥き出しにしているという理由ばかりでなく、その姿勢から死や病気などただならぬ状態が連想されやすく、とかく強烈な印象を与えるからである。一方、前景の男性の仕草は、何かを悲嘆しているようにも受け取れるし、単に眠気を払うために目をこすっているようにも見える。さて、この絵に対して次のような反応が与えられた場合、欲求・圧力分析はどういった判断を下すであろうか。

「この男の人と女の方は交際していたのだけれど、女の方が最近、冷たい態度を取るようになってきた。どうやら他に好きな男ができたよう。それで、この男の方はカッとなり、思わず女の人を手にかけてしまった。しばらくして、男の方は自らの犯した罪の大きさに恐れおののいている」

この物語を要素に分解してみると、まず前面に浮かび上がってくるのが、男性のやや未熟な愛情欲求と凄まじい破壊力をもった衝動性(=欲求)である。さらに、男性の愛情欲求を満たしてくれない女性(=環境)という側面も見逃せない。では、Murrayの方法にのっとって、この反応を与えた本人に殺人衝動の存在を見るのは果たして妥当なのか。結論を言

えば、そのような解釈は的外れである。

的外れとする第一の理由は、この種の殺害をテーマとした反応が、健康な被検査者グループの中でかなり高い頻度で出現するという点にある(鈴木, 1997)。ロールシャッハ・テストでいうならば、それはポピュラー反応、あるいはそれに準じるほどの頻度である。このように一般的な反応から、殺人衝動を引き出すのは甚だ不適切であろう。第二の理由——こちらの方が肝心であるが——は、殺害という衝動的な行為は、物語の筋を形作るプロセスの中で派生してきたものであるために、それだけを抽出し、単独の意味を持たせることが難しいという点にある。というのも、被検査者はこのカードを見た際に、もっとも強烈な印象を与える女性像に注意が惹きつけられたはずである。被検査者は、まずはここに「死」を見たのであろう。とりわけ、その尋常ならざる姿に突発的な出来事が連想され、それを土台に「殺害の場面」という基本的な統覚が成立したと考えられる。さらに、前景の男性の仕草を「恐れおののいている」と解釈することにより、男性による殺害という筋が完成したのではないか。つまり、この物語は、衝動的な殺人ありきで出来上がったものではない。衝動的な殺人は、女性の姿を基礎に、他の情報を加味したうえで帰結されたものと推論されるのである。この推論が正しいならば、より重視すべきは、登場人物の示す行為といった要素ではなく、女性の姿を死と捉えたところから始まる物語の筋の方である。

このように考えてくると、物語を分解し、男性の殺害という行為だけを取り沙汰するのはきわめて不適切であると言わざるを得なくなる。登場人物の特定の行為など、物語を形作るさまざまな要素は、当然のことながら、物語全体の文脈の中で議論されなければならない。物語が分解することの難しいゲシュタルトであるとする理由はここにある。

形式分析を通してみた TAT 物語の特徴

次に、TAT 反応の形式的な側面に注目した分析法について考えてみたい。それは、言うなればロールシャッハ・テストの形式分析に相当するアプローチである。本邦において、この分析法を提唱したのは古くは、坪内(1984)であるが、後年、これをより詳細で包括的にまとめあげたのが安香・藤田(1992)である。彼らは、TAT 物語を以下に示すような観点にそって分析するのが有効であると主張す

る。すなわち、(1) 絵の情景が物語からきちんとイメージできるか (絵の主要 D を標準的に知覚し、描写しているか)、(2) 物語の筋に一貫性と流れがあるか (物語を作れという教示に従って、まとまりのある物語が作れているか)、(3) 現在、過去、将来のバランスはとれているか、(4) 物語の結末は明るい、暗い、あるいは何も語られていないか、(5) 印象に残る言葉づかいはあるか、(6) 反応時間や物語するときの態度はどうか、といった諸点である (p. 32)。

このような観点から各カードの反応を分類し、すべてのカードの結果を総合するならば、被検査者における認知や思考の特徴、感情の状態などが見えてこよう。それが、有力な情報であることは論をまたない。しかし、この方法にもやはり限界がある。このことを、カード 4 に対して 2 人の男性が個別に与えた 2 つの物語を例にとって説明しよう。なお、カード 4 には、ある一定の方向を見つめる男性の姿と、その傍らに寄り添う女性の姿が描かれている。この男女の間には、何らかのすれ違い、意思の対立、あるいは葛藤が存在するかのように読み取れる。

(カード 4 に与えられた物語 1)

これから決闘に行こうと息巻いている男を、女の人が必死になだめている。「そんなことしないでほしい」と。でも、この男は決闘に命をかけている。なぜなら、男には守るべきプライドがあって、それを大切に生きてきたから。結局、男は女を振り切って決闘に行く。

(カード 4 に与えられた物語 2)

この 2 人は恋人どうし。しかし、この女の世界焼きが過ぎて、男の方は辟易し、疲れ果て、もう別れたがっている。女の方は別れようとする男が信じられなくて、そうさせないように迫ってくる。男には、それもまたうとうしい。だから、やがて女のもとを去っていく。

さて、趣を大いに異にするこの 2 つの物語を、先の形式的な観点から分析し比較してみると、意外なほどよく似たものとなる。この 2 つはいずれも、絵の中の主要 D 領域 (すなわち、男性像と女性像) を取り入れた話となっているし、筋に一貫性もある。また、いずれも現在、過去、将来のバランスはとれているし、いずれの結末も、男が自己愛的に (ある

いは利己的に) 「女を振り切る」という、さして「明るく」も、さりとて「暗く」もないものである。しかしながら、この 2 つの物語が、まったく異なる印象を読み手に与えるのはなぜか。言うまでもなく、物語の底を流れる主題が明らかに異なるからである。つまり、両者を決定的に分かつのは、「決闘に行こうとする男となだめる女」(物語 1) と「積極的に迫る女とそこから逃げたい男」(物語 2) という、安香・藤田の言うところの「筋・主題」(p. 38) のみである。ところが、この「筋・主題」にこそ、被検査者の価値観や異性観、コンプレックス、そして、ある種の行動傾向など、パーソナリティ特性を読み取るヒントがいくつも含まれているのである。

敢えて言うまでもなく、物語の筋や主題は、反応の形式的側面に属するカテゴリーではなく、反応の内容に直接関わるものである。このことが如実に示しているように、TAT はすぐれて内容分析的な志向性をもった心理検査なのである (鈴木, 2002; 高瀬, 2012)。なぜ、そう言えるか。まず、TAT の刺激材料は、確かに多義的な解釈を誘うところはあるものの、ほぼすべてが具象絵画である。しかも、「絵を見て物語を作る」という要請は、絵の中に示された個々の情報を意味づけ、それらをすべてまとめ上げねばならないことを前提としている。すなわち、人物が描かれているならば、その年齢や性別、場合によっては職業などの社会的属性までも同定せねばならないし、複数の人物が描かれているならば、その関係性を意味づけねばならないことを言外に求めている。したがって、この課題が問うているのは、被検査者がいかなる内容をもった物語を与えたか、ということにつきよう。それは、ロールシャッハ・テストとは明らかに異なる点である。基本的に知覚の検査であり、反応の自由度がきわめて高いロールシャッハ・テストでは、カードのどこをどう見ようが、全体を見ようが、一部を見ようが、回転させようが、させまいがすべてが許容される。それゆえ、領域、決定因、形態水準といった具合に形式的な側面から反応を分析し、知覚の特徴を見ることに重要な意味がある。しかし、こういった自由をいっさい許さない、制約の多い課題である TAT では、内容こそが被検査者に接近しうる主たる情報源なのである。繰り返しになるが、この課題では、一つひとつの物語をまるごと対象にして、内容を丁寧に見ていくことに意義があることを改めて強調しておく。

TAT 物語におけるテーマやプロットとは何か

これまでの議論から、TAT 物語の特徴として、以下の二点が明らかとなった。第一に TAT 物語は一つのまとまったゲシュタルトであるため、その物語の内容を分解して、各要素の特徴をみていくことは元々の物語が内包していた意味を損ねる恐れがあること、第二に物語とはすぐれて内容的志向性を帯びた題材であるため、形式的な分析のみでは十分にその特徴をとらえきれないこと、である。しかしながら、ここでもっとも強調したいのは、TAT 反応にあっては、その主題や筋にきわめて重要な意味が含まれているという点である。それは、これまでの議論に一貫している。では、物語の主題や筋に重要な情報が含まれるのはなぜか。本節では、この自明ともいえる問いを敢えて取り上げ、TAT 物語の生成過程という観点から改めて議論したい。

TAT の物語がどのようなプロセスを経て生まれてくるかを考えてみる。絵を見て物語を作るように要請されるとき、人はまず絵の中に表現されたさまざまな情報に目を走らせる。そして、既知の概念や自らの体験に照らし、それらが物語を作るにあたって必要かつ利用可能な情報なのか、また、それらをうまくまとめられるかどうかを検討するであろう。その際には、その人の中のもっとも中心的、あるいは支配的な思考や感情、関心事、価値体系、コンプレックスなどが前面に現れ、検討に大きな影響を及ぼすと考えられる。つまり、個人の中核的な観念、思想、あるいは感情に沿ったかたちで、絵の中の必要な情報だけが抽出され、情報の統合が試みられるのである（それ以外の情報は捨象されるか、場合によっては辻褃合わせのために歪曲されるかもしれない）。やがて主だった情報が統合され、物語の主題が決まると、筋（プロット）が方向づけられる。さらに、これと並行するかたちで、細部（ディテール）も設定され、物語にいろいろを添える。このようなプロセスを経て物語は形を成していくと考えられるのである。

もちろん、このプロセスは、ごく短時間のうちに個人の内部で起こっていることであるし、すべてのことが意識的に行われているわけでもない。それゆえ、ときに知らず知らずのうちに、その人らしさが物語の主題、筋、あるいは細部に表現されるのであ

ろう。

ここに述べたのは、物語が生まれてくるプロセスについてであるが、それは同時に TAT 物語の主題や筋の中に重要な情報が含まれると考える所以でもある。そもそも、この検査が被検査者に求める「apperception（統覚）」の原義とは、「既に獲得している知識や観念の主体に照らし、意味を理解する心の過程」である（Oxford Dictionary of English）。換言すれば、それは、情報を統合し物語の主題や筋を構成していく過程に個人の内的枠組が反映される、ということの意味しよう。そうであるならば、構成された結果としての、主題や筋を検討しない限り「主題統覚検査」たりえないし、真の意味での被検査者の理解にはつながらないであろう。

TAT 物語分析の理想的なアプローチ： 鈴木の方法について

前節では、物語の主題や筋に重要な意味が含まれることを述べた。しかし、ここで新たな問題が沸き起こる。主題や筋といった有機的なデータは、科学的方法を旨とする心理検査という枠組の中でいかに扱われるべきか。さらに、元来、心理検査とは、「被検者の行動やその成果を所定の観点から一定の標準に照らして質的あるいは量的に記述する方法」（池田，1981）と定義されるが、こと TAT 物語に至っては主題や筋の「標準」をどのように定めれば良いのか。本節では、これらの問いに答えるべく、鈴木（1997）の提唱した方法を取り上げその意義を論じるとともに、この方法に基づいた TAT 物語分析における理想的なアプローチについて具体的に検討することとする。

1997 年、鈴木はこれらの問いに一定の回答を示す方略を一冊の書物にまとめ、上梓した。それが、彼のいう「物語分析」（鈴木，1997）である。鈴木は、TAT の物語に示された状況を「マレーのように『欲求』と『圧力』に分解せず、全体的に捉える立場」をとり、「TAT の物語を一つのパターンをなすものとして丸ごと把握するという姿勢」に徹した（p. 39）。これを実現するため、まず鈴木は、すべてのカードに共通に適用しうる分析システムという考え方を排し、各カードの独自性を重んじた。そして、各カードに与えられた、ありとあらゆる物語を、その主題や筋に着目して類型化を試みたのである。

対象を類型化する（すなわち、同じ構造や機能を

もっているものをまとめてグループ化する、あるいは基本的な構造や機能は同じであるが、細部において異なるものを枝分かれさせる) という作業は、科学の諸領域でよく用いられる方法である。博物学は類型化の原点に位置する学問領域であるし、身近な例でいえば医学における診断がそれに相当する。また、生物学の一角を担う分類学は明らかにその方法論にのっとっている。類型化とは、取りも直さずターゲットとする対象をよりよく知るための手段である。すなわち、ターゲットが全体の中のどの系統に属するのか、どのような種類のものと近しいか、あるいは遠いか、さらに、それとよく似た種類のものが周辺に数多く存在するか(つまりマジョリティに属するタイプか)、それとも少ないか(マイノリティに属するか)を知ることが、その対象の性質についての深い理解をもたらしてくれるのである。

鈴木分類では、各 TAT カードに与えられたあらゆる物語の内容を、まずいくつかの大カテゴリーへと分類し、そのそれぞれを中カテゴリー、小カテゴリー、さらに細かい下位カテゴリーといった具合に細分化していく方法が取られている。敢えて大胆に記述すれば、大カテゴリーは物語に底流するテーマに、中カテゴリー以下は物語の筋(プロット)に対応していると言うこともできる。これは、物語という有機的なデータ分類するうえで、もっとも適した方法であると思われる。まさに有機体である生物の世界を「界・門・綱・目・科・属・種」に分類することと、それは同じ意味を持つ作業であったといえよう。膨大な労力をかけて、この分類がなされたことにより、それぞれの物語の「顔」(鈴木, 1997, p. 10) がよく見えるようになったのである。

ところで、こういった分類枠が設けられたことにより、他にも重要な価値がもたらされた。すなわち、それぞれの分類枠に相当する物語を量的に扱うことを可能にしたのである。これにより、それぞれのカードに与えられた物語の主題や筋が、出現頻度の高い一般的なものなのか、それとも特異なものであるかを、客観的に把握できるようになった。それは、必然的に、心理検査としての一つの標準を提供することにもなった。むろん、質的なデータを量的に扱うことについては批判もある。しかしながら、心理検査が、科学に基づいて対象の記述を組織的に行うことを前提とする以上、量的な観点を取り入れるのは避けては通れない道である。

なお、蛇足ながら、全カードに共通に適用しうる

分析システムを敢えて導入せず、各カードの独自性を重んじたのも、鈴木慧眼であったことを付言しておく。物語という反応は、結局のところ、各カードの絵という刺激状況に規定されるところが大きい。全カードに共通する分析法は、例えば Murray の欲求 - 圧力分析のようにあまりにも抽象的に過ぎ、各カードの実態にそぐわない。そうであるならば、当初からカード別の分析法を採用した方がはるかに実用的であろう。

さて、ここまでは鈴木の提唱した物語分析の意義について、筆者なりの観点から論じてきたが、ここで、この方法をどのように活用すべきかについて具体例を用いて解説しておきたい。題材としては、先に紹介したカード 4 に対する 2 つの物語を取り上げることとする。

第一の物語の筋を要約すると、先述のとおり「決闘に行こうとする男となだめる女」となる。この筋をカード 4 の分類表(鈴木, 1997, pp. 392-393)に当てはめてみると、それは典型的な反応の一つであり、健康な男性成人のグループにおいても一定以上の数をもって出現していることが確認できる。したがって、この物語は、荒々しい世界に身を投じることを男性の理想的な生き方であるとみなした、一般的な反応であると言ってよいであろう(鈴木, 1997)。このように基本的な統覚には問題はないものの、物語のディテールに注目すると、この反応の特徴がもう少し鮮明に見えてくる。それは「決闘に命をかける」「男には守るべきプライドがある」「それを大切に生きてきた」といった言葉で、男らしさが必要以上に強調されている点である。同種の物語と比べても、過剰な表現と言わざるをえない。しかし、その一方で、女性の影は薄く、非力であり、必死の懇願もまったく聞き入れられていない。すなわち、この物語には、男性の優位性、女性の従属性といった、いささか偏った男性観・女性観がかなり強いトーンで表現されていることが理解できる。一步、踏み込んで解釈するならば、この過剰なまでの男性性の強調は、被検査者の内にある、男性性に関する何らかのコンプレックスを反映しているのかもしれない。

第二の物語の筋は、「積極的に迫る女とそこから逃げたい男」となる。これは先の分類表では、健康な男性成人のグループの中で決して多くはないものの、稀とは言えない頻度で出現していることが確認できる。それゆえ、これも基本的な統覚には問題が

ないことをまずは確認しておく必要がある。しかしながら、これは先の物語とは正反対で、ずいぶん積極的な（あるいは干渉的・支配的ともいえる）女性像と受け身的な男性像を見ていることに留意しなければならない。ここには、被検査者自身の女性観や男性観が示されている可能性が高いからである（鈴木，1997）。その視点に立って、この反応を改めて眺めると、ここに表現された女性像は「恋人」というよりも、「母」の面がずいぶん強調されていることが見えてくる。さらに、ディテールに着目すると、女性の母的な支配性に対する男性の態度について印象的な表現がいくつか見つかる。「辟易」「疲れ果て」「うっとうしい」などである。ここには、支配的な女性に呑み込まれそうになることへの忌避感が表明されていると見て良いであろう。以上をまとめると、この物語には被検査者の抱く母子関係のイメージが表現されているようである。わけでもこの母子関係の中での被検査者の重要なテーマは、支配的な母からの精神的な自立なのである。

以上が、鈴木の方法に基づいた、TAT物語の分析・解釈の実際例である。ここではあくまでもデモンストレーションとして、2つの反応例だけにに基づき、その分析・解釈の方略を、反応の特徴をやや誇張するような形で大袈裟に示した。しかし、実際の分析・解釈にあたっては、1枚のカードだけから読み取れたことを過大に評価しない方がよい。鈴木は次のように述べている。「いくつかのカードの反応からのそれぞれ独立の推論が一点で交われれば、推論は正しく、推論されたものの存在は確実である」（鈴木，1997，p. 13）。つまり、ある材料から引き出された仮説が他の材料からも裏づけられることによって、解釈の妥当性が高まるのである。このことは、しっかりと心に留めておかねばならない。

最後に、鈴木の提唱する分析・解釈法のプロセスを筆者なりにまとめたリストを示しておく。

- (1) 反応（物語）の筋を抽出する。つまり当該反応を要約する。
- (2) 分類表・頻度表（＝標準）に照らして、当該反応が一般的なものなのか特異なものなのかをみきわめる。
- (3) 当該反応と一般的な反応とのずれが確認できたとき、それがどのようなずれであるかを吟味する。このずれに基づいて、当該反応を大まかに意味づける。
- (4) 内容の細部、表現等に注目して、上の大まか

な意味づけに奥行や広がりを与える。その際にはさまざまなパーソナリティ理論も援用する。

- (5) 最後に全カードの解釈結果を総合し、パーソナリティの全体像を描き出す。

いまTATを学んでいる人、あるいはこれから学ぼうとしている人にとって、何らかの参考になれば幸いである。

文献

- 安香宏・藤田宗和編著（1992）. 臨床事例から学ぶTAT解釈の実際. 新曜社.
- 池田央（1981）. 検査. 藤永保 編 心理学事典. 平凡社. 219-223.
- Murray, H. A. (1943). *Thematic Apperception Test manual*. Cambridge: Harvard University Press.
- Searls, D. (2017). *The inkblots: Hermann Rorschach, his iconic test, and the power of seeing*. New York: Crown/Random House.
- 鈴木睦夫（1997）. TATの世界：物語分析の実際. 誠信書房.
- 鈴木睦夫（2002）. TAT：絵解き試しの人間関係論. 誠信書房.
- 高瀬由嗣（2012）. TATが映し出すパーソナリティの諸側面：ロールシャッハ・テストとの比較を通して. 中京大学 心理学研究科・心理学部紀要, 12 (1), 193-221.
- 坪内順子（1984）. TATアナリシス：生きた人格診断. 垣内出版.